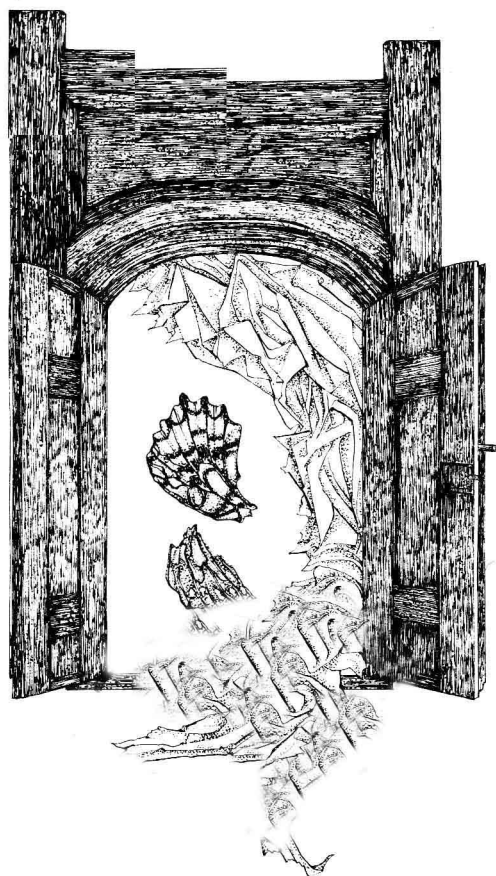


聖少女・倉橋由美子





聖少女・倉橋由美子・新潮



聖少女 (せいしょうじょ)

●著者 ^{くらはしゆみこ} 倉橋由美子 ●発行者 佐藤亮一
●印刷所 二光印刷株式会社 ●製本 新宿加藤製本所 ●発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町71番地 郵便番号 162
電話東京 (03) 260-1111 振替東京 808 番
昭和40年 9 月 5 日発行 昭和46年10月25日17刷
定価 580 円

© Yumiko Kurahashi Printed in Japan 1965

落丁本はお取替いたします。

聖
少
女

I

ほくがはじめて未紀を知ったのはある秋の土曜日のゆうぐれどき、虎ノ門の近くの路上でだった。そのときほくは仲間の三人と車を走らせていた（この仲間たちのこと、ほく自身のこと、この日ほくたちが決行して成功をおさめた冒険のこと、などについてはいつか語る機会があるだろう）。いや、正確に言えばそのときほくらは車を徐行させながら顔を集めて皺くちやの紙幣を勘定していたのだ。眼をあげたとき、ほくは白い生きものがふわふわと近づいてくるのに気づいて車をとめさせた。それが未紀だった。ほくは窓をあけて首をだし、

「乗るつもりかい？」

「乗せてって」

「どこまで？」

「どこまででも」

「なんだあんたは？」といいながらエスキモー（これは仲間のひとりである）はあわてて札束を握りつぶしてポケットにおしこんだ。この白い猫のような闖入者にほくらはいっせいに警戒の眼を光らせたが、彼女のほうは助手席をひとりで占領して——そこに坐っていた侯爵はとんぼがえりをうってうしろの席にころがりこんでしまった——くったくなげに脚を組んだ。

「名前は？」

「ミキ。未だという字に糸偏の紀」

ほくはこのときの未紀の顔がおもいだせない。意志も感情も不在のまっ白な楕円形の顔、あるいは月ほどもありそうな大きさを輝いていた黒い瞳の記憶があるだけだ。未紀の容貌やからだつきや服装を描写することになんの意味があるだろう？ 未紀に多くのことばを貼りつけて読者のまえにつれだそうとする小説家に呪いあれ、だ。ほくなら、むしろ未紀を透明にして読者のまえからかきけすためにことばを使いたい。とにかく、未紀は、みえなくてもいい、そこに存在していることさえ信じられればいいのだ。しかし最低限の義務として、未紀をスケッチしておこう。

この日未紀は白いニット・コートを着ていたとおもう。太い毛糸がからみあって縄文式土器の紋様に似た編み目をつくっているゆるやかなコートに、おなじ毛糸のストール。このコートの下には白銀の色をした繻子の中国服。そしてその下に（ほくは想像したが）黒い下着でいたいたしく縋帯された裸身。この少女にかぎって、なぜ黒い下着が異様ないたましさを暗示するのか？ そ

それが隠しているのは、すさまじくえぐりとられたような暗黒ではなかったか？　すでにこのときから未紀の肉体に対するほくの頑強な神秘化がはじまっていた。その日未紀はほくらといっしょに横浜まで行った。ほくらはほくらの流儀で遊び、朝になったとき未紀の姿はなかった。

こんなふうにして未紀と知りあつてもう数年たつ。そのあいだ、つい最近まで、未紀とは数えるほどしか会うことができなかった。それもこの大都会がほくに与えてくれた僥倖としてだ。ほくの生活の軌道は未紀のそれとはまったく無縁の方向にのびていた。高校二年が終つたところではくはある事件のために退学処分をうけ、しかしうまく大学にはいり、そのあとは、ガクレン、アンボ、国会乱入、逃亡、逮捕だ……こうしたことは未紀の生活とはなんの関係もない。未紀はそのあいだどんなふうに生きていたのだろうか？　ほくの想像力の絨毯は未紀をもとめてけばだち、そのなかにくるまってほくは身動きできなくなっていた。そんなある冬に、たとえば、一月には珍しいほとんど垂直などしゃぶりのなかで、膝までぬれて未紀を見失つたこともある。黄土色の長持のような都電がいつも数台発着している角筈の路面はそのとき雨のしぶきにつつまれて港のようにみえた。タクシイは凶暴な唸り声と水煙をあげて水雷艇のように走っていた。そのあいだをぬれた脚でかけぬけながら、ほくは白いブーツの脚、若い女神の腰をさがしまわつた。またある日ついにほくは未紀の書いてくれた番号に電話をかけてみたこともある（緊急重大ノ事件ノトキ以外ハ絶対ニカケナイデと彼女はいつていた）。すると事務的だが若々しい男の声がでて、ハイ、コチラ* * 警察署デスガといった……

ほくが未紀に近づき、その手や髪にさわることをできるようになったのは、数カ月まえにおこ

ったある事件のためである。あらゆる事件がそうであるように、この事件の外貌も新聞記事のなかにみることができる。A紙によれば、

乗用車の母娘死傷

【横浜】 七日午後八時ごろ横浜市金沢区富岡町一九二五の横須賀街道で東京都港区赤坂青山南町大学生宮下未紀さん（二二）運転の乗用車が栃木県下都賀郡桑絹町* * 運転手（四六）の山谷石を積んだ大型トラックに衝突、乗用車はめっちゃめっちゃになり、いっしょに乗っていた未紀さんの母操さん（四三）は頭を打って即死、未紀さんは頭などに全治二カ月の重傷を負った。原因は未紀さんのスピードのだしすぎと前方不注意。

もうひとつの新聞の見出しは、**女子学生車の暴走**となっている。記事の内容は大同小異だ。要するにこれはありふれた交通事故のひとつにすぎない。そして頭を打った未紀が、この事故からさかのぼって過去の記憶を一部失ってしまったことも、交通事故にしばしばともなう器質性のアムネジア（健忘症）の一例にすぎない、ともいえる。ほくは早速病院に未紀をたずねた。厚い繃帯を頭に巻かれていた未紀は、未知の惑星からこの地上に墜落してきた人間という印象を与えた。なにより驚かされたのは彼女が一時はものもしゃべれず、簡単な動作もできないほどばらばらにこわれていたことだ。まるでこわれた自動人形だった。未紀はたんに過去の記憶を失ってい

ただけではなく、ことばと、したがってそれがつくりあげていた自己というものを破壊されていたのだ。ほくはほとんど毎日病院をおとずれ（もちろん未紀はほくを識別することができなかったが）、未紀の恢復の歩みに立ち会っていた。そして未紀が直立歩行をおぼえた猿のように歩きはじめ、ふたたびことばを使いはじめにつれて、ほくと未紀のあいだには、奇妙に抽象的な、しかし充分安定した友情ができあがっていった。未紀は昔のほくのことと自分のこともおもいださなかったで、ほくは彼女のまえではあの事故以後にしか存在しない人間であり、ほくたちは下半身のない二つのトルソーのように、過去のないからだでおたがいをみとめあっていたことになる。

未紀は記憶をとりもどさないまま、退院した。その前後の数日、ほくは未紀に会いに行くことができなかった。というのは（このことは最初に書いておくべきだったが）、ほくはこの夏、カリフォルニア大学に留学することになっていた、そして渡航はほんとうなら先月末のはずだったが、ほくの場合、ヴィザの問題をめぐってトラブルがおこったために、いまだにほくは宙吊りのままになっているありさまだった。綱が断ち切られてアメリカ留学の希望がみごとに墜落してしまふ可能性もあった。なぜなら、数日まえ、突然アメタイ（ほくらはかつてデモをかけてその門をゆすぶったアメリカ大使館のことをそうよんでいた）からよびだしがあつて、過去においてコミュニケーションだったことがあるかときかれたのだ。平然としてほくはノーと答えたが、アメタイはそれに対して徹底的なインヴェステイションをおこなうといった……そんなわけで、ほくは未紀と会うことができないでいた。だがある午後、ほくに電話がかかった。管理人室のまえの受話器をとりあげたとき、きこえてきたのは未紀の声だった。それは退院したばかりの病人にふさ

わしい、力と表情に乏しい、いくぶんぎごちない声だった。

「あたしです。未紀です」

「やあ。アメタイからの電話かとおもった」

「アメタイって？」

「アメリカ大使館。トラブルがあつて、ヴィザがおりないんです。全然ピンチだ。前科がばれそうなんで……」

「ゼンカつてなんのこと？」

「ことばがわからないの？ 詳しい話は会ったときにしましょう。それより、退院したんでしょう？ 頭のほうはまだからっぽのまま？」

「ええ。でもそれは、からっぽという感じとは少しちがってるわ。なにか、サラサラした砂みたいなものが頭につまっているみたいなの。でもそれがあたしに、なんの関係もないんです。こわれた砂時計……」

「……いつ会えますか？」

「あさつてか、その次の日。午後、あたしのうちへいらつして。じつはけさ、あなたにお送りしたものがあつて。あたしのノートですけれど。読んでいただきたいの。死んでしまったほうの未紀が書いたノートらしいですけど、あたしにはわけがわからない……まるで砂漠の遺跡から掘りだされたふしぎな碑文みたいにあなたに解読を手伝っていただきたいのです」

この声をきいたとき、ほくは鋭い刃物に似た不安をつきつけられたおもいだった。正直にいえ

ば、それはある決定的な意味をもつ遺言状でありそれを開封したときほくと未紀の関係があきらかになるにちがいない、とほくは考えたものだ。たとえば過去の未紀がほくに對してある意志を——ほくは自分の妄想にしたがつてそれを愛とよぼう——表明していたのではないか、とほくは考えた。そして同時に、そのノートを読むことはこの種の妄想を確実に撲殺することであるにちがいない、とも考えた。

そのノートは夜八時ごろ速達でとどいた。未紀のノートは次のようにはじまっており、ほくは読むにつれて無重力圏をただようような困惑におちいった。

いま、血を流しているところなのよ、パパ。なぜ、だれのために？　パパのために、そしてパパをあいしたためにです。もちろん。……あたしはパパに電話をかけてこんなふうに話してみようかしらと考えました。息を切らして、熱っぽい声で。でもできればじかにパパの耳に口をつけてというのが効果的です。それにあたしはパパの耳の形がとても気に入っています。あの耳のなかの廻廊は、男らしく簡潔で、手入れもいきどいています。今度会ったときにそういつてあげましょう。耳のこと、それから血のことも。

パパ。ふつうなら、おじさまってよぶところでしょうけれど、おじさまはいやです。それではただのいかかわしい紳士とズベコーの組合せと変らない、という以上の理由でいやですから、やっぱりパパとよばせていただきます。パパもじきにこのよびかたに慣れることでしょう。少くと

も、ある種の若い女はババくらしいの、つまり自分の二倍以上の年齢の男をしばしばそうよんでいますから、ババもあたしの甘ったれといやがらせもちょっぴりまじったこのよびかたを、苦いお顔でうけいれてくださればいいのです。

いま、ほんとに血を流しています。痛くて、すてきな気もち。いつからだったか……あのときは、一滴も血をみないですんだのに。でもこれはたしかではありません、ババの武器にほんのわずかに血を塗ったことに、あたしが気がつかなかっただけなのかもしれない……あれがはじまつた瞬間、壮絶な出血というあたし自身の期待が裏切られたので、あたしはひどく狼狽しました。あの儀式のはじまりは、水道管が破裂したときの勢でまっかなものが噴きだしてババの顔を汚すことでなければなりません。これこそあたしの割礼の儀式、善の包皮を切り裂いて悪を裸にする儀式にふさわしいのに。しかし、ことはすべて曖昧に進行しました。もっともババのように数知れない情事を重ねてどっしりしている男のかたには、未熟な女の子との、犠牲や苦痛の血にまみれた契約といったものなんか、うんざりにちがいませんでした。

食堂の電話を応接間のほうに切りかえると、ババに電話してみました。

「おはよう、ババ……はい。でもあたし、きょうはお化けじみた顔してるから会いたくない……まだお化粧もしてないのよ。だって起きたのがつききなんですよの……うん、眠れたわ、こわれたお人形みたいに眠っていました。あれから、あたしの部屋にご帰還したのが、けさの四時よ。ママはさいわい夜のあいだは一時的な死人になつて熟睡しますから、あたしは朝帰りの猫の要領で忍びこめばいいってわけ。おなか、ぺこぺこだったから、コーン・フレイクにバナナの輪

切りとカシュー・ナッツをまぜて温い牛乳をかけたのを食べて、それから、あのけがの痛みをおなかのなかにしまいこんで、巻貝の形をした眠りのなかにもぐりこんでしまいました。夢もみないで。眼がさめると真昼の一時。そして血！……パパ、まだ痛い。パパったら、鋸で切り裂いたみたいな傷を残したんですもの……けががなおつたらお電話します。そしたら、またつれて。……もちろん、Bの字ではじまるところよ。さよなら」

嘘です。電話はかけませんでした。そのかわりにあたしはベッドのなかで書きはじめたのです。た。

さて、ゆうべのあたしたちのおしゃべり。

「どうしたの？ まだ怖いのかい？」とパパ。

「ううん。もう怖くない。痛かっただけ。パパはどうなの？」

「からっぽさ。胸をたたいてごらん、ポストをたたくような音がするよ」

「あ、ほんとだ。こんな音がするなんて、パパのほうがよくつぽどかなしそうだわ。胸のなかは潮がひいたあとの海辺みたいに荒れはてています。いろんなものがごろがっています」

「なにが？」

「たとえばたくさん女のひとの骨やなんか……」

「女と別れるとき、骨を一本もらうんだ。墓石のかわりにするためだ。肋骨を一本抜きとつてくれる女もいるし、脚の腓骨をくれる女、頭の蓋を剥ぎとつてお皿のかわりに使つてちょうだいといつてくれる女、骨盤をもつてらっしゃいという気前のいい女、いろいろあるね。みんなよろこ

んで骨をくれることになっている」

「なんだかさびしくて骨がふるえてきそうなお話。でもあたしは骨はさしあげませんから……眠いの？」

「いや、眠くない」

「じゃ、もつとお話して。パパは女のひととあいしあったあとでいつもどんなお話をするの？」
「さあね。おもいだせないね。たぶん、話なんかしないのだろう。はじめからしまいまで黙っていることもある。男というものは、しゃべらずにすむならしゃべらずにすませたい動物なんだ。女はうんとしゃべるか、全然しゃべらないかだ。きみは相当なおしゃべりだな」

「ただ、ごろごろとのどを鳴らして甘ったれているだけなのに」

「タバコをとってくれ」

「はいパパ。あたしも一本」

「きみはいくつだったっけ？」

「もう忘れたの？ この夏が終るとはたちよ」(と嘘をつく)

「ああ。それならぼくのことをパパとよんでもおかしくない年だな。はたちをすぎたらそれはやめてくれ。それからタバコもやめたほうがいいね。はじめてキスしたとき男の子としてるような感じだったよ」

「そんなこといわれるとちよっぴりかなしいわ。でも、もしタバコでもすわなかったらあたしみたいに若すぎる女の子とするキスは、きつと青臭い野菜ジュースの味がしたわよ。パパだってタ

パコはおやめになったら？　あたしの腕のなかで煙突になつてゐるパバは好きじゃないな。それに、歌にもあるじゃない、Don't smoke in bed 　って。そうだ、パバとお別れするときには涙をいっばいためてこの歌を歌つてあげます」

あたしはパバの口からタバコをとりあげると、パバのからだのうえにはいあがりました。よくみておきたかつたからです、あたしのパバを。パバは眼をとじていました。大往生をとげたような顔をしている。でも眠つているときは少しいびきをかいたり口をあけたり歯ぎしりしたりして、もつとあらあらしいことでしょう。あたしは唇で睫をくすぐり、鼻の稜線を唾で光らせ、やすりのような頬の砂漠を横切つて、タバコの味のある口をちよつとなめ、それから堅い胸の平原へとすすんでいきました。そこはプレイボーイらしく陽やけしていて気もちがいいので（ただしささやかな胸毛は笑わせます）、しばらくあたしのおなかをつけてねそべってみました。船の甲板にいるような感じでした。

「ねえ、あたしって、おいしかった？　死後硬直みたいに硬くてまずかった？　あたし、パバを完全にあいすることができなかったわ。そうでしょ、パバ。それをおもうと、絶望的。とてもかなしい。ばかな女の子。パバをりっぱにあいしてみせると、そればかりを自尊心にいきかせながらここまでやってきたのに。でも、パバはいざとなると怖い神さまみたいに重たかつたわ。まるで、粘土でできた神さま。どうやってあいしてもわからなくなつたの。あいして、あいして、融かしてしまおうと、死にものぐるいで、からだを裂いてパバを迎える覚悟だつたのに……あたしがまだ若すぎるからですか？　はやく完全にパバをあいせるようになりたい。ああ、

パパの柱を甘い蜜でとかしてあげられる花になりたい……パパを愛してます」

最後のことはをいうとき、パパの耳たぶを鋭く咬んでやりました。すべてうわごとです。半分酔い、半分さめてあたしはしゃべりつづけていました。

ここで注釈をいれておきます。あいするとあたしが平仮名で書くのは、make love のこと、つまりあたしのからだでパパをとりこにすることを意味します。漢字の愛するは、心の自由を捧げてしまうことですが、こちらの意味では、あたしのいったことは嘘です（その証拠にあたしはパパの耳たぶを咬んでやりました）。あたしはパパを愛していません。正確には、愛すべきでない、です。しかしパパはいずれあたしを愛さなければなりません。それがあたしの目的なのです。

あたしはパパのわき腹に髪や顔をこすりつけながらとめどなくうわごとをつづけました。

「……パパ、眼をあけてみて。死んだ真似はいや。ねえ、あたしを愛してる？……ええ、女の子ならだれでもがきく意味でよ。まあ、いやあな笑いかた。スフィンクスがにやりと笑ったみたいだわ。もちろんパパはあたしを愛してないわね。愛してない……パパはだれも愛せないひとなんだから。パパの心は粘土でできてるんだわ。でも、それなのに、その理由で、あたしはますますパパにいかれてしまう……エジプトの博物館の絵ハガキにとてもグロテスクな、まっくろの魔像がでてるのをみたことがあるわ。あんな魔像のまえに立つと、そのくらやみの塊に吸いよせられてしまうにちがいないとおもったけど、パパはその魔像だわ……どうしてそんな眼でみるの？あたしをばかにしてる眼？ いいの、もっとばかにして。あたしはもうパパのものだから、どん